

## 総 括 報 告

# 「21世紀のクオリティ・オブ・ライフをめざして」 全国大会を開催



佐藤馨一  
SATO Keiichi

はじめに：平成14年度全国大会は、2002年9月25日(水)から27日(金)までの3日間、北海道大学をメイン会場として、札幌市において開催した。大会のメインテーマを「21世紀のクオリティ・オブ・ライフをめざして」とし、第57回年次学術講演会、研究討論会、特別講演会、全体討論会、交流会、学生交流会の各行事を企画実施した(表-1)。

本大会の特徴としては、自然が数多く残っている北海道における開催であることから、自然との調和を保ちながら進めていく今後の社会資本整備のあり方について、「自然環境共生インフラ」をキーワードとした全体討論会を開催したこと、過去の北海道大会に比べ、年次学術講演会の会場を多くし定員を増やすための対策を取った



写真-1 高度教育機能開発センター正面玄関

表-1 全国大会行事概要

行 事	日 時	会 場	実 施 概 要
第57回年次学術講演会	9/25(水) 8:45~16:15 9/26(木) 9:00~12:00 9/27(金) 8:45~16:15	北海道大学：工学部， 高度教育機能開発センター， 情報・エレクトロニクス系棟	講演総数：4326題 座長総数：557名 延べ参加数：23501名
研究討論会	9/25(水) 16:30~18:30	北海道大学	討論会題数：22題 参加者数：1645名
特別講演会	9/26(木) 13:30~15:45	札幌市民会館	・土木学会会長 岸清氏 「土木界をより知ってもらうために」 ・土木学会企画委員会 「土木技術の社会性と土木学会の変革」 参加者数：1550名
全体討論会	9/26(木) 16:00~17:45	札幌市民会館	・「自然環境共生インフラ - グローバルに 考えローカルからの行動を - 」 参加者数：1550名
交流会	9/26(木) 18:30~20:00	ホテルニューオータニ札幌	参加者数：544名
学生交流会	9/25(水) 19:00~21:00	北海道大学内 レストラン「はるにれ」	参加者数：111名
その他 市民向け行事 見学会 見学会	9/20(金)~9/27(金) 9/27(金) 9/27(金)	札幌駅西口コンコース 札幌市郊外，小樽市 有珠山	2002 土木学会全国大会 GALLERY 建造物とダム&峠視察コース 有珠山噴火視察コース



写真-2 第57回年次学術講演会



写真-4 学生交流会



写真-3 研究討論会「近代土木遺産の保存」



写真-5 特別講演会

こと、試行的に液晶プロジェクターによるセッションを設けたこと、講演者をフェロー会員に限定した特別セッションを実施したことなどがあげられる。本大会の参加受付総数は、6853名(事前受付 5846, 当日受付 1007)であった(写真-1)。

組織と運営：北海道支部は、2000年11月の会長による大会開催依頼を受け、北海道支部の総務幹事及び前回の全国大会北海道大会経験者を中心とし、全国大会開催のための準備を開始した。2001年2月に第1回準備委員会を開催し、全国大会の開催予定および主な行事である学術講演会・特別講演会・交流会などの開催会場を決定した。2001年9月に、第2回準備委員会を開催し、国土交通省北海道開発局長を実行委員長とする実行委員会を設置した。これに引き続き開催された第1回実行委員会にて北海道大会の組織および平成14年度全国大会実施大綱(案)を決定した。北海道における土木工学関係の教育機関を網羅する組織形態とした。熊本大会と同様に実行委員会の中に実質的な活動を行う幹事会を設置した。幹事会は、学術部会・特別講演及び全体討論部会・総務部会・学会誌編集部会からなり、各部会からの報告

を受けると同時に連携を取る役割を担った。2001年9月から全国大会開催までの期間、約1ヶ月に1回の頻度で開催された。その間、実行委員会は2度開催され、幹事会で取りまとめた運営内容を議論し承認する役割を担った。

大会運営にあたっては、東北大会・熊本大会に簡素化を継承した。活動の中心を学術講演会及び全体討論会とした。学術講演会では、「液晶プロジェクターの試行」及び「特別セッションの実施」を行った。一方、全体討論会では将来の土木技術者の役割として環境を創ることをテーマとして取り上げ、北海道を題材としたパネルディスカッションを行った。大会当日は、実行委員60名のほか、実施委員60名、学生アルバイト120名の協力を得て運営した。

定例行事：第57回年次学術講演会では、4326件(熊本大会3743件)の研究発表が59会場に分かれて実施され、延べ、23501の方が聴講した(写真-2)。

研究討論会では22テーマ(熊本大会は17テーマ)について実施し、1645名(1会場平均75名)を越える参加者により熱心な討論が行われた(写真-3)。今回は学術

講演会実行委員会により企画された討論会が2テーマ実施され、中でも「近代土木遺産の保存」を取り上げた討論会場では広く一般市民へも公開され、開かれた土木学会・全国大会を印象づけることとなった。

学生交流会は、大会1日目、北海道大学生協「はるにれ食堂」にて開催された。北は北海道から南は沖縄県までの計16大学より、当初予定していた参加定員100名を上回る111名の参加者を得ることができた。参加大学の内訳は、金沢大学大学院（14名）、九州共立大学大学院、長崎大学大学院（8名）、大阪大学大学院（2名）、徳島大学大学院（2名）、室蘭工業大学大学院（19名）、名城大学大学院、九州大学大学院（7名）、岩手大学大学院（5名）、琉球大学大学院（6名）、広島工業大学大学院、熊本大学大学院（3名）、九州工業大学大学院（3名）、東京大学大学院、京都大学大学院（2名）、北海道大学大学院（36名）である。学生交流会を企画、担当した北海道大学大学院工学研究科大学院生の司会、進行のもと、大会実行委員長である平野道夫氏による歓迎の挨拶と、副実行委員長である能登繁幸氏の乾杯発声により交流会が開会された。歓談中、学生間では交流の和を広げるとともに、北海道ならではの名産によるビンゴゲームを行い場は盛り上がり、大盛況のもとで無事に会は閉会となった（写真-4）。

大会2日目の午後には、札幌市民会館を会場にして、特別講演会、全体討論会を実施し、その後、ホテルニューオータニ札幌において交流会を開催した。

特別講演会は、例年とは異なり、招待者による講演形式ではなく、はじめに、土木学会新会長 岸清氏から基調講演として「土木界をより知ってもらうために - 土木学会の情報発信改革 -」をご講演いただき、引き続き、会長講演を踏まえて、土木学会企画委員会による今後の土木界に求められるいくつかの課題について集中的に論議するため「土木技術の社会性と土木学会の変革 - 21世紀を創る土木界に求められるもの - 」というテーマでパネルディスカッションが行われた。参加者は、約1550名であり、1500部用意した配布資料も参加者全員には行き渡らなかつたほど、会場が満員に達する盛況ぶりであった（写真-5）（講演概要は、後のページに示す）。

交流会は、昨年を大きく上回る544名の参加者による熱気の中、北海道を代表する民謡である「江差追分」の演奏で幕を開けた（写真-6）。続いて斉藤和夫大会副実行委員長の主催者挨拶（写真-7）、来賓として中村北海道大学総長（代理井上副学長）（写真-8）、堀北海道知事（代理佐々木副知事）（写真-9）、桂札幌市長の祝辞（写真-10）、国内外来賓の方々のお名前を紹介した後、岸会長の乾杯の発声（写真-11）により歓談に移った。

途中、海外来賓の飛び入り挨拶もある盛り上がりの中、



写真-6 江差追分の演奏



写真-7 斉藤大会副実行委員長



写真-8 井上副学長



写真-9 佐々木副知事



写真-10 桂札幌市長



写真-11 岸会長



写真-11 コンサドールズのパフォーマンス



写真-13 水口幹事長



写真-14 佐伯大会副実行委員長



写真-15 札幌駅西口コンコース「2002 土木学会全国大会 GALLERY」

J1 コンサドーレ札幌のオフィシャルダンスドリルチーム「コンサドーレズ」のパフォーマンス(写真-12)で高揚感の中、終宴を迎え、時期開催支部の水口幹事長から来年度の大会開会挨拶をいただいた後(写真-13)、佐伯浩大会副実行委員長の閉会挨拶で終了した(写真-14)。多数の参加をいただいた事に感謝するとともに、講演発表者の参加が増えることを望みたい。

全体討論会：国土の将来像として、「美しい国土(ガーデン・アイランド)」、「世界に誇れる都市」、「循環型・環境共生型国土づくり」を標榜する日本において、土木技術者は自らの技術力を卑下することなく、百年の計を「心の豊かさを享受できる環境づくり」の視点から打ち出すべきであるとして、『自然環境共生インフラ - グローバルに考えローカルからの行動を -』をテーマに全体討論会を行った。北海道大学工学研究科長佐伯浩教授をコーディネーターとし、土木技師の経歴を踏まえ地方行政に取り組んでいる北海道栗山町川口孝太郎町長、開発途上国を含め多くの国をご自身の目、足で実感されている女優の星野知子氏、SEA(戦略的環境アセスメント)の我が国における中心的研究者である千葉大学法経学部倉阪秀史助教授、北海道の環境を求め東京から帯広に会社を移し、景観デザインの仕事をされている高野ランドスケーププランニング(株)高野文彰氏の4名をパネリストとし、熱心な議論が行われた。また討論会にさきだち、「北海道土木の風景 自然環境共生インフラ - 」と題するスライドショーが行われ、10分という短い時間ながら会場の多くの人々に感銘を与えた(討論会の概要報告は、後のページを参照)。

広報他：会員向けには、学会誌7月号で全体の案内、9月号の特集記事で全体討論会について、各パネラーの意見を掲載するとともに、北海道における自然共生型社会資本整備の事例を紹介した。

一般市民向けには、今大会に向けて、大会と市民会館行事のポスター、リーフレットを作成し配布した。また、職場等ポスターやJR 北海道の札幌近郊電車中吊り広告

などによるPRと報道機関等を活用し、情報提供を行った。また、大会期間中は、大会参加者に本大会の実施委員が一目で分かるように、黄緑蛍光色のジャンパーを大会スタッフに配布し、大会参加者のサポートを滞り無く行った。

見学会は、旅行会社に委託して5コース用意したが、最終的には「建造物とダム&峠視察コース」と「有珠山噴火視察コース」(いずれも9月27日催行)の2コースのみが、少ない人数で実施された。

市民行事として、JR 札幌駅西口コンコースに「2002 土木学会全国大会 GALLERY: 21世紀のクオリティ・オブ・ライフをめざして」を設け、9月20~27日の7日間にわたってパネル展を開催した(写真-15)。このGALLERYでは、パネル、写真、ビデオ等によって、本大会とその意義についての周知をはかった。特に、「土木の歴史」「環境との共生」「新しい社会資本の姿」をテーマとしたパネル展には、一般の方も多数来場いただいた。謝辞：本大会は3日間の大会期間中、極めて天候に恵まれ、目立ったトラブルもなく終了することができました。

各行事とも成功裡に終えられたのは、本部全国大会委員会、学会誌編集委員会、本部事務局、大会委員等の大会関係者の皆様の絶大なるご支援とご協力のお陰であり、この場を借りて心からお礼を申し上げます。中でも、本大会の実施に当たって中心的な働きをされた北海道支部全国大会実行委員会の総務部会総務班長 桑島隆一氏(国土交通省北海道開発局)学術部会副部会長 萩原亨氏(北海道大学大学院)、さらには、学会誌9月号および本誌1月号の編集、取りまとめを行っていただいた学会誌編集部会副部会長 木幡行宏氏(室蘭工業大学)の各氏においては並々ならぬご尽力をいただき、感謝の念に堪えません。さらに、本大会で試行的に実施した液晶プロジェクターの講演発表に理解を示していただき、全国大会改革にご尽力されている本部全国大会委員会(磯部雅彦委員長)のご英断とご努力に敬意と謝意を表します。